MMMT：Monday Morning Manabi Time!

LEARN WELL
株式会社 ラーンウェル

FBライブ：MMMTの内容

MMMT：Monday Morning Manabi Time!

１．オープニング（導入）

２．ボディ（本論）

・研修転移

・研修評価

・OJT　等

３．クロージング（結び）

© 株式会社ラーンウェル

研修評価と研修転移

・評価とは？

・転移との関係性

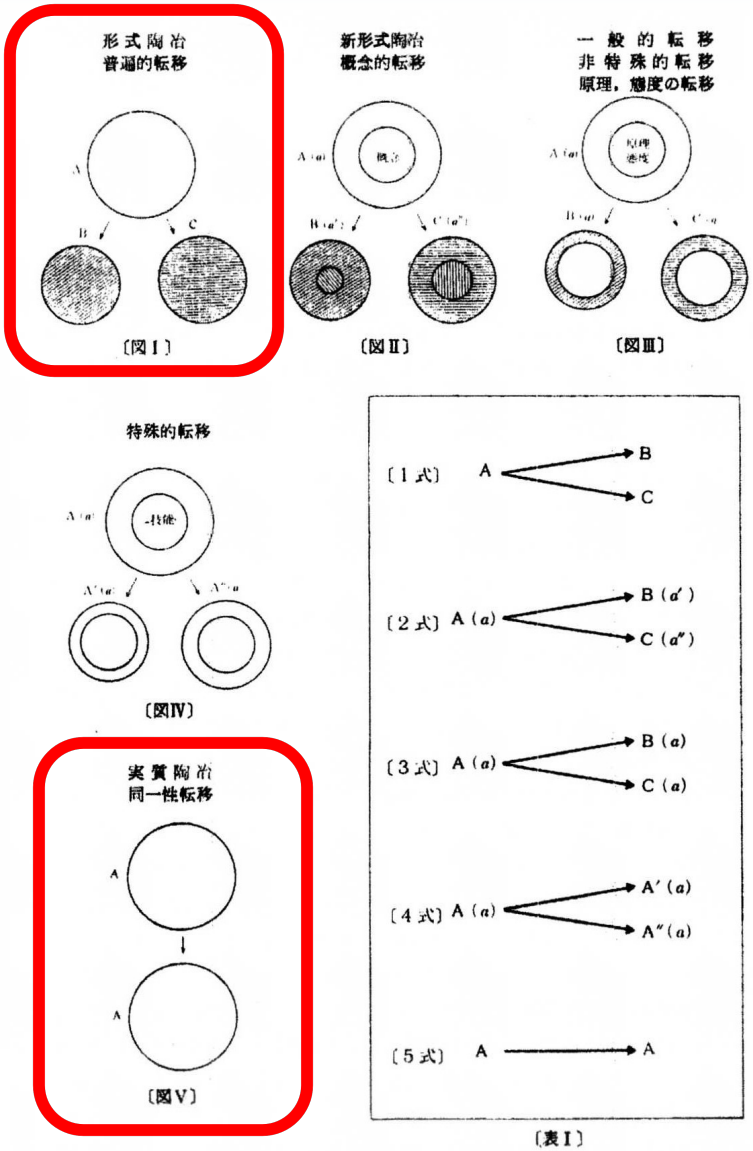
・これまでの研修評価

・これからの研修評価

・

© 株式会社ラーンウェル

（3）形式陶冶と実質陶冶



佐藤（1979）は、5段階に分けて、
転移の間の関連性を図式化しました。

（佐藤三郎（1979）教育方法
吉田・長尾・柴田編　有斐閣双書.）

© 株式会社ラーンウェル

（3）形式陶冶と実質陶冶

●教育学における「学習転移　Transfer of Learning」

学校　→　社会　（形式陶冶・遠転移）

先知後行（せんちこうこう）　朱子学

●企業研修における「研修転移　Transfer of Training」

研修　→　職場　（実質陶冶・近転移）
（Knowing）　（Doing）

知行合一（ちこうごういつ）　陽明学

伊與田（2008）『己を修め人を治める道～「大学」を味読する』

© 株式会社ラーンウェル

即効性はないが、後から効いてくる・・・

「素読には即効性はないが、確実に人格形成の根本を育んでくれる。
語学、科学などは成果が分かりやすい実学。一方、信頼、察する力、
やり抜く強い意志、思いやりなどは見えにくく評価できないもの。
しかし逆境の時、困難な状況の時こそ、この人間力が大事になる」

安岡定子氏（埼玉新聞　2022年6月20日）

© 株式会社ラーンウェル

本学と末学

・徳性を育てていく学問を「本学」と呼び、
　知能・技能を育てていく学問を「末学」と呼ぶ。
・本になる学問は「人間学」と呼び、
　知識や技術を身につける学問を「時務学」という。
・昔は、学問といったら人間学のことをいった。
　そして知識、技術を学ぶ時務学のほうは「芸」といった。
・学と芸の両者を修めることによって、人の指導者にもなれる。

・修身科がないことを憂えた明治天皇が、明治23年に「教育勅語」を出された。
・「大学」の精神が、教育勅語の中に表れている。

・焼野原と化した国土復興。経済復興をする上において一番手近なものは、
　それに必要な知識、技術を身につけるということ。
　だから、本学である修身科を廃して、末学のほうに重点が置かれた。

『己を修め人を治める道～「大学」を味読する』伊與田覺（2008）

LEARN WELL
© 株式会社ラーンウェル

本学と末学

・ヨーロッパの学問の特長は、まず理論に優れることである。
あらゆる事物の研究は、科学的と称する分析法に収斂する。
・日本の教育が洋風化し、その結果、人間はいかに生くべきかという
実践の学、人間の学は、俗なものであり、遅れたるものとして
一顧だにしないという風潮が世を覆って、今日にいたっている。

・学科を極めて技術者だけは養成されようが、
人を治め得る器量の者はできないであろう。

・王陽明は、大学は「大人になるための学問」とし、
「大人とは、天地同根万物一体と観じ得る人」と断じる。
・反対に、自分と他人を分けてしか考えられない人を「小人」と言っている。

・明治以降の「才」を重視した教育によって、支配階級やインテリの思想、世界観は、
唯物的、利己的、唯我的になっており、安岡先生は「精神革命」を起こす必要が
あると考えた。

『儒学に学ぶ経営の心～修己治人』柳橋由雄（1990）

LEARN WELL
© 株式会社ラーンウェル

本学と末学

・「ケックの道」 人間には規範が重要。
・戦前までは江戸由来の伝統的な規範形成教育があったが、
占領期にGHQが日本の教育を徹底的に調査して
「これは外した方がいい」としたものの中に、規範形成教育が含まれていた。

・「正」とは「この線で止まれ」という意味。正しいことをやろうと思ったら、
基準となる線が必要。
・本能にブレーキをかけること。これが修身の最大の眼目。

・近代西洋思想は、個人主義、エゴイズムが特徴。自分と他人を分離しがち。
・現代人は、近代西洋思想の「物事の知識は全部外側から学ぶ」という考え方に
毒されている。
・東洋思想の古典に共通して書いてあることはそれとは逆で
「人間が生きるために重要なものは、全部あなたの中にある」ということ。
・これからは、西洋思想と東洋思想の知の融合の時代になる。

『「大学」に学ぶ人間学』田中佳史（2021）

© 株式会社ラーンウェル

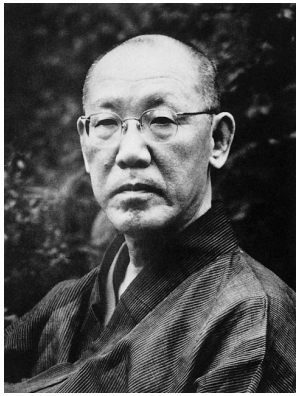
Discipline：規律、躾、鍛錬、訓練、学科

「形式陶冶Formal discipline」とは、思考力、記憶力、判断力、意志力等の精神的諸能力の育成を重視する考え方で、ラテン語といった古典語やユークリッド幾何学といった数学中心の古典的教養を重視する教育的立場を指します。それに対して、文化の内容を知識として習得させるために、近代科学技術に直結する実学的教養（物理学、生物学など）を重視する教育的立場が「実質陶冶 Material discipline」です。

形式陶冶説は、能力心理学faculty psychologyを基盤とし、ある領域で形成された能力が他の領域に「転移」することを前提としています。形式陶冶を支持する立場の人たちは、ラテン語や数学といった実生活には役立たない「退屈で難しい講義」を受ける事で、精神mindが鍛えられ、それによって、他の領域での学習も進むと考えたのです。この形式陶冶の考え方に対して「一つのことを学んだからと言って、それは他の分野に簡単には転移しない。転移するのは、同じ要素が入っていた場合のみ」という「同一要素説」を唱えたのが、ソーンダイク（1901）だったのです。

© 株式会社ラーンウェル

本学と末学



・陶冶：試練を加え育てる、
　　生まれついた性質や才能を鍛えて練り上げる

・今は、科学と論理と経済生活とが万事という時勢である。
・真の学問は、先ず何によるべきか。
　それこそ、善き師友、活きた人物の感化に勝るものはない。
　次に、諸の書物、ことに古典である。
・抽象的一面的な理論（例：マルキシズム）ほど
　人物を教養する力は薄いのである。

『人間としての生き方～現代語訳「東洋倫理概論」を読む』
安岡正篤著・武石章訳・安岡正泰監修（1929・2008）

© 株式会社ラーンウェル

本学と末学

・1927年に創立した金鶏学院と、1931年の日本農士学校によって、
安岡は、明治以来の日本の教育に代案を突き付けたと言える。

・明治以来の学校教育に疑問を感じて、安岡は2つの科目を課した。
正徳科目と呼ばれる学科と、利用科目と呼ばれる実地。

・勉強には大きくわけて2つある。
1）自己を確立するための勉強　2）自分の仕事に関する勉強

・吉田良次は、戦後教育、いや明治教育の欠陥は、教育から宗教や道徳を
取り去ったことだと断言する。大人へと育っていく子供たちに、
人間かくあるべしという規範教育、別な言葉で言えば、宗教教育、道徳教育を
やらなかったから、体だけ大人になった動物のような人間ができるだけだという。

『人生の師父　安岡正篤』 神渡良平（1991）

© 株式会社ラーンウェル

本学と末学

・社会主義者、共産主義者等の過激な革命思想をもった人々が、
GHQの中に割り込み、日本を実験台にして、いろいろとやった。
・教育勅語の廃止だけでなく、日本の修身教育、歴史教育、地理教育を
廃止させる。そしてこれを円滑に進め、その抵抗を少なくするために、
国民の破棄を奪う、覇気や活力のはけ口として、スポーツを奨励する。
・徳性、属性、習性の3つから、人間は成り立っているといってもよい。

『日本はどうなるか、どうするか』 安岡正篤（1983）

・昭和21年12月、安岡は公職追放されると、埼玉県菅谷に移った。
・日本農学校の経営を引き継いだ埼玉県。
人格教育の場は、技術教育の場に変化していった。
・（敗戦後の）日本の秩序は、天皇の存在によるものであり、GHQは、政治
改革は天皇制までは手を付けない方がいいと判断するようになっていた。

『安岡正篤の世界～先賢の風を慕う』神渡良平（1991）

© 株式会社ラーンウェル

徳と才

「徳は本なり、才は末なり」

・今日一般には、才は、才能、才幹、才知ほどの意味で、
徳は、徳性、徳望、人望などの意味で用いられている。

・安岡教学の要諦となる所は「人を知る」ことに尽きる。
またその機要となる所は「才、徳の分を審らかにし、
小人、君子の別を明らかにする」ことであった。

『安岡正篤「光明蔵」を読む』荒井桂（2012）

© 株式会社ラーンウェル

徳と才

・「徳は本なり、財は末なり」この考え方は「大学」のみならず、
　東洋思想の根源をなすもの。
・財は、貝に「才」がついている。この「才」というのは「働き」という意味。
・才能ある人を、人材、人財という。「やり手」
・単なる才能ある人を人物とは言わない。人物の裏には、必ず徳がある。

・人間には「徳」と「才」の両方が大切。
・才よりも徳の優れた人を「君子」といい、
　徳よりも才のほうが優れている人を「小人」という。
・自分より他人を大切にする人を「君子」といい、自分を中心に動く人を「小人」という。
・徳も才も両方ともに優れていながら、
　なお徳のほうが才よりも優れている人は「大人」「人物」「賢」という。
・同じく徳も才も優れているが、
　才のほうが徳よりもなお優れている人を「人才（人材）」という。
・逆に徳も才も少ないけれど、
　徳のほうがちょっと優れている人を「賢」に対して「愚」という。

『己を修め人を治める道～「大学」を味読する』伊與田覺（2008）

© 株式会社ラーンウェル

徳と才

・人間を、才と徳とに分ける。
・才は、徳に及ばぬ。

・才が徳より勝っておるタイプの人間は、小人。
　徳が才より勝っておる型の人間を、君子という。
・褒美には二つある。才人には、賞。徳ある人には、地位。
・小人の才子を用いるには、よほど腕に覚えがないと。

・できた人は、成功したときよりも
　むしろ失敗のときの始末のほうが立派である。

『先哲が説く指導者の条件～「水雲問答」「熊沢蕃山語録」に学ぶ』 安岡正篤（1998、2005）

© 株式会社ラーンウェル

徳と才

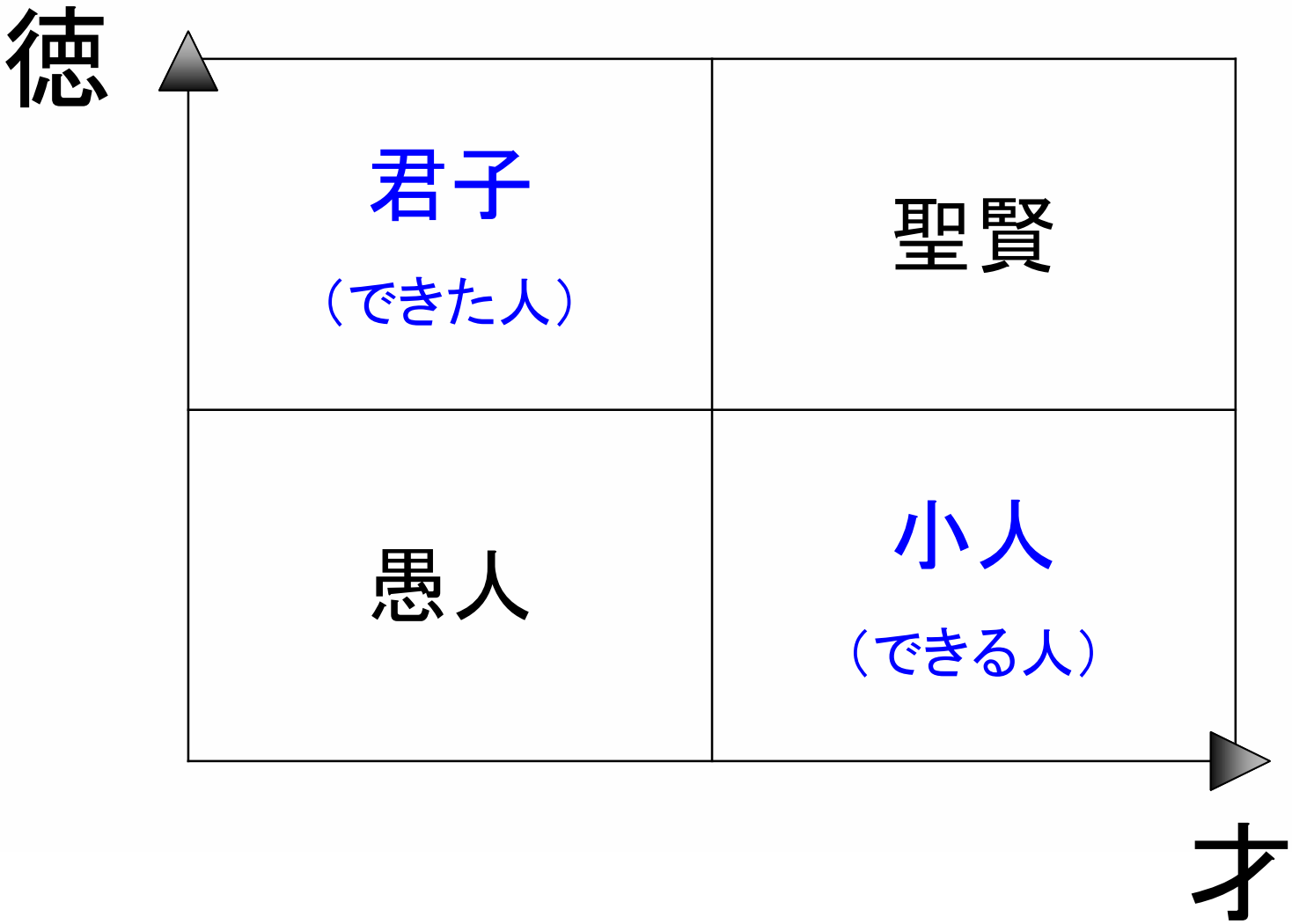
・巧言令色：小人（才が徳に勝った人）
　剛毅朴訥：君子（徳が才に勝っている人）

・聖人：徳あり、才あり　君子：徳＞才
　小人：徳＜才　愚人：徳なし、才なし

『論語と経営』柳橋由雄（1998）

© 株式会社ラーンウェル

徳と才



© 株式会社ラーンウェル

参考：両利きの経営

・exploration知の探索、exploitation知の深化
・新しい知とは常に、既存の知と、別の既存の知の新結合でうまれる。
・知の深化に偏るコンピテンシートラップにより、
知の探索がなおざりにされると、中長期的にイノベーションが枯渇する。
・源泉となる知は、既に日本の大企業の中で活用されないまま埋もれている人材にある。この大企業内部の人材、技術者を一度社外へ出し「彼らに知の探索をさせるべき」

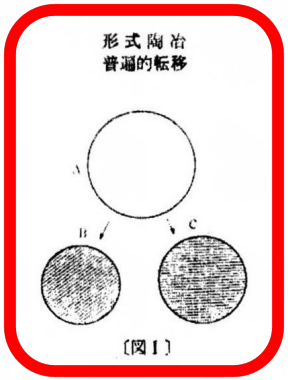
『世界標準の経営理論』 入山章栄（2019）

・Exploitation(深化・有効活用）と、Exploration（探索・開拓）
・両利きの経営の能力ー既存事業の深化で競争しながら、新規事業を探索することができれば、変化に直面しても組織は生き残っていける。
・両利きの経営の付加価値は、成熟事業の貴重な資源を、新規事業に適用できる所にある。

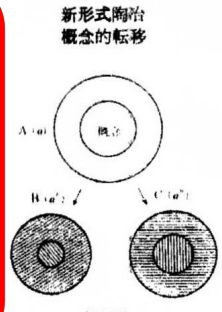
『両利きの経営』C.A.オライリー（2019）

© 株式会社ラーンウェル

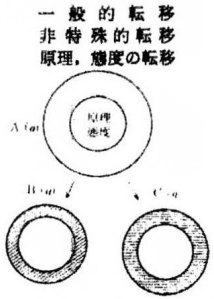
(3)形式陶冶と実質陶冶



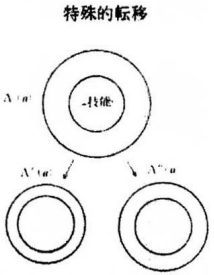
〔図Ⅰ〕



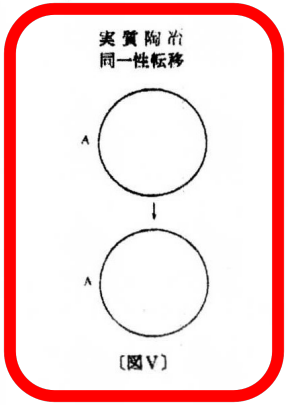
〔図Ⅱ〕



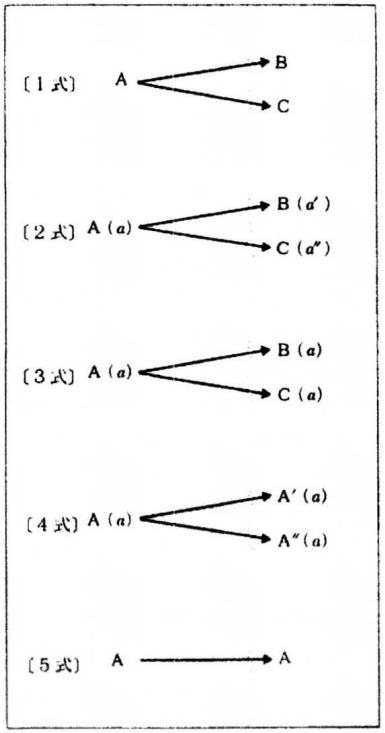
〔図Ⅲ〕



〔図Ⅳ〕



〔図Ⅴ〕



〔表Ⅰ〕

形式陶冶的学び（本学・徳・探索？）と
実質陶冶的学び（末学・才・深化？）の
両方が必要では？

しかし、（転移が見えにくい）
形式陶冶的学び（例：階層別研修）を、
どう評価するか？

佐藤（1979）は、5段階に分けて、
転移の間の関連性を図式化しました。

（佐藤三郎（1979）教育方法
吉田・長尾・柴田編　有斐閣双書.）

© 株式会社ラーンウェル

FBライブ：MMMTの内容

MMMT：Monday Morning Manabi Time!

１．オープニング（導入）

２．ボディ（本論）

・研修転移

・研修評価

・OJT　等

３．クロージング（結び）

© 株式会社ラーンウェル

MMMT：Monday Morning Manabi Time!

LEARN WELL
株式会社 ラーンウェル